て解説しているのは直感的で分かり易い．しかし，「筋」は「条」ではないだろうか？
カバノキ属やサクラ属のように分類群で樹皮にまとまりのあるものもあるが，一般的には樹皮のタイプと分類システムとはほとんど関係がない．逆にこの点が樹皮観察の面白さでもあるのだろう．

樹皮一つをとっても，唯一種の樹木が加齢とともにさまざまに姿・形を変えていくことは，フィールドでの樹木観察の経験のある方ならお分かりだろう．本書の特徴の一つは，若木，成木，老木と時間を追って樹皮の変化を示しているところにある．評者もダケカンバやミズメなどの樹皮の移り変わりを本書で再確認した次第である．

著者は樹皮だけで樹木を分類できるのかと問いかけ，同時にこれを否定している．あらかじめ植物相が判明している場所ならいざしらず，樹皮だけで樹木を同定するのはやはり困難で，樹形のほかに花や葉そして冬芽などの特徴と組み合わせて樹木の特徴を掴むことが望ましい．しかし，樹木が年齢とともに樹皮の様子を変えていくのを眺めていることは興味深いものがある．手元に置いておきたい一冊である．（門田裕一）

□小山鐵夫（監）：**発見！植物の力 1〜10**
48+40+40+40+40 pp. A4. 2006. ￥13,650.; 40+40+40+40+40 pp. 2007. ￥14,175. 小峰書店．ISBN: 4-338-21901-7, 4-338-21902-5, 4-338-21903-3, 4-338-21904-1, 4-338-21905-X; 978-4-338-21906-8, 978-4-338-21907-5, 978-4-338-21908-2, 978-4-338-21909-9, 978-4-338-21910-5.

ややこしい表記になったが，要するに第一期として１～５分冊，第二期として６～10分冊がまとめて函入りになっている．第１分冊の末尾には全分冊をカバーする植物名と用語の索引があり，また本シリーズ全体についての解説と監修者の標榜する資源植物学について述べられている．分冊の書名は 1. 人間と植物．2. 穀物．3. 野菜．4. 布と紙．5. ゴムとウルシ．6. 木と木材．7. 花．8. くだもの．9. お茶・砂糖・油．10. スパイス・ハーブ・薬である．１−３，９−10は小山氏，４−８は藤川和美氏が担当している．

本書は函の背文字に「小学校中学年以上」と表示されているように，子供の自由研究のヒントを提供しようと意図したものと思われる．はじめの30頁ほどはイラストと美しいカラー写真を軸に，さまざまなトピックを提供しているが，資源利用の歴史的背景だとか，伝播を示す世界地図だとか，自然保護の問題や生態系についてまで，子ども向けということで質を落とすことなく，数多くの話題が提示されているが，説明文はごく短く，スペース的には写真やイラストが主体である．第２分冊以降のどの分冊も，33頁以降に「指導者・保護者の皆さんへ」と題する詳しい解説が５頁あり，参考文献表まで伴う高度なものである．子供の興味を喚起したうえ，大人がこれらの文献に誘導することを意図したものと推察される．これに加えて「植物の分類について」と題する１頁が必ずついていて，分冊で扱った植物を例として，その分類上の位置づけが示されている．全体として，従来なかった行き方である．

本書は学校図書館での利用を意図したものと思われるが，内容の有意義さを認めても，現在の教師の忙しさからみて，分冊に示されたような話題を授業で扱うことは，むずかしいのではあるまいか．そういう本を敢えて購入するには，値段の点で問題があるように思う．単冊での購入も可能なようだが，上質紙使用と図書館用堅牢製本のため，40頁ほどの一冊が2,600円前後だから，子供の本としてはためらう値段ではなかろうか．むしろ博物館や植物園なら，来場者の興味喚起のタネとなり，行事のヒントを拾うのに役立つだろう．教育熱心な家庭むきとも言える．５冊をまとめて収容している蓋つきブックケースは，分冊の背文字を見えなくしていて，無用と思う．大学の植物教室でも，近頃は植物自体を知らない学生がほとんどだから，こういう本を置いておけば，分類学に限らず，彼らの将来の方向の選択に役立つだろう．（金井弘夫）

□平嶋義宏：**生物学名辞典** xii＋1292 pp. ￥4,500+税．2007．東京大学出版会．ISBN: 978-4-13-060215-0.

ユニークな，しかし学名に関する包括的な辞典である．著者は，すでに『学名の話』

（1989），『生物学名命名法辞典』（1994），『生物学名概論』（2002）などを上梓されており，生物学名に関しては国内に肩を並べる人のない権威者である．80才代に入ってこのような大著が出版できるというのも，自家薬籠中の素材を辞典のかたちに展開されたからだろうか．ただし，いわゆる辞典の堅苦しさを乗り越えるために，119に及ぶ「囲み記事」が案配されている．著者ならではの豊富な話題が軽妙な文章で紹介されており，これを読むだけでも結構楽しい著書である．

著者の狭義の専門分野は昆虫学であるが，書名にあるように，植物，菌類の話題も広く取り上げられている．書の構成としては，ラテン語についての一般的な解説に続いて，本体は多様な用語の説明に当てられている．ただ，その分類，配列も，「一般的な形容詞」の章に続いて，「色に関する用語」，「形と寸法に関する用語」，「表面構造に関する用語」など，特徴的な名前の章が並ぶ．もちろん，「植物の構造に関する用語」，「環境に関する用語」などという章も準備されている．何といっても，豊富な実例が全編を通じて盛り込まれているのがこの書の他に例を見ない特徴だろう．

命名は生き物の研究そのものではない．しかし，大量の情報を扱う生物多様性の研究では，情報処理に齟齬のないことはコミュニケーションの基本と期待される．本書はリンネ生誕300年記念出版とされるが，二命名法の採用によって生物多様性の情報処理の基盤を世紀を超えて確立したこの巨人を偲ぶにふさわしい出版物といえる．学名を扱う生物学者のひとりとして，この出版物が得られることを，著者にも出版社にも感謝し，関連の研究者に広く関心をもっていただきたいと念じるところである．（岩槻邦男）

□清末忠人：**自然と教育を語る－思い出をたぐって** 641+20 pp. A5. 2007. ￥3,000. 自版. ISBN: no number.

先に清末氏の「わたしの歩み－清末忠人研究集録」の紹介をしたとき，自選集では物足りない旨を表明しておいた．同感の人が多いようで，あとがきによると「（前回同様）友人にすすめられて…」130篇の作品が集録され，喜寿の記念出版となった．永年教育界にあった著者だけに話題は広範で，植物・動物はもとより，自然保護，歴史，民俗，教育・行政にまで及ぶ．1952年の鳥取大火で，それまでの資料すべてを焼失したとのことで，集録されていないが，いずれそれらを発掘する動きもおこるのではあるまいか．入手については〒680-0037 鳥取市元町104の著者に連絡されたい．（金井弘夫）